

5. 高齢者の散歩から見た伝統的町並み環境の整備のあり方に関する研究

—八女市福島伝建地区を事例として—

A Study on Historical Townscape Environments from the View of Elderly People's Behavior with Walking

—In Case of Preservation Districts for Groups of Historic Buildings in Fukushima, Yame-City—

石橋知也*・柴田久*

Tomoya Ishibashi and Hisashi Shibata

The purpose of this paper is to clarify relationships between elderly people's behavior with walking and historical townscape environments through investigations into the actual conditions of walking in Yame-City, as a case study. Fukushima district in this city is adopted Preservation Districts for Groups of Historic Buildings in May, 2003. The major findings include the followings. 1) The purpose of walking is walking in itself. 2) Elderly People compose a simple walking route with natural landscape and varied streetscape. 3) The walkers like natural landscape, safety, varied streetscape and activity of people in pedestrian space. 4) It is possible that walking behavior affects change in consciousness toward townscape.

Keywords: Walking, Elderly People, Townscape, Pedestrian Space, Preservation Districts for Groups of Historic Buildings, Yame-City

散歩, 高齢者, 町並み, 歩行空間, 伝統的建造物群保存地区, 八女市

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

散歩は、純粋に歩くことが目的化され、性別や年齢を問わず様々な人々によって行われている活動である。特に高齢者においては、健康維持を目的とした散歩が広範に行われている。急速な高齢化が騒がれ高齢者の自立が求められている今日、散歩のような健康への配慮としての自発的な取り組みは、今後より一層重要視されると考えられる。一方で、高齢者を考慮した居住環境の整備としては、バリアフリーなどの福祉施策が全国各地において行われている。しかし、高齢者は歩行弱者として捉えられると同時に、万人と同様の一般歩行者でもあり、高齢者の日常的な生活行動から居住環境の歩行快適性を根本的に考え直すことは今日的にも重要と考えられる。

以上の背景を踏まえ本研究では、1)高齢者の散歩の実態について基礎的知見を得ることを試み、2)散歩の実態から居住環境の歩行快適性が得られる質的要件を抽出し、3)散歩の観点から考える伝統的町並み環境の整備のあり方について考察することを目的とする。対象地の選定に際しては、高齢者の居住率、転出率を考慮して八女市福島地区としている。この地区は歴史的建造物を多数有する地域であり、国の「重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)」の選定を受けた経緯をもつ。

(2) 本研究の位置づけ

既成市街地と新興住宅地を対象に高齢者の散歩に着目した先行研究として、森ら¹⁾は地域環境の質的要件の違いが高齢者の散歩に影響を及ぼす要因であることを比較分析から論じている。また、住環境の整備条件について都市における人々の散歩に着目したものと末ら²⁾の研究があるが、対象地域を一般市街地とする点と散歩者を幅広い年齢層と

する点において本研究とは着目点異なる。一方、伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)に関する先行研究は数多く見受けられるが、中でも伝統的町並みを生活環境と位置付けた研究として西山ら³⁾は、伝統的町並みを観光資源とする地域において、公的制度による町並み整備の状況を把握し住民や行政へのヒアリング調査から、町並みの現状について文化財、生活環境、観光資源としての3つの価値から論じている。しかし、伝統的町並みにおける歩行活動⁴⁾を中心とした生活環境の歩行快適性について高齢者の生活状況を踏まえて論じたものは管見では認められない。前述の通り森らは高齢者の散歩に環境の質的要因が影響を与えることを指摘している。これを踏まえ、伝統的町並みにおける環境の質的要因が散歩に与える影響を明らかにする必要性がある。本研究は散歩という日常的な行動規範より伝統的町並み環境を捉えなおすことで、生活環境としての伝建地区整備のあり方について論じる点において新規性を有するものである。

(3) 研究手順

本研究では、まず高齢者の日常的な行動である散歩に着目し、八女市福島地区の重伝建地区周辺を対象に高齢者の散歩実態と町並みに対する意識を聞き取り調査より明らかにする。次に調査によって得られたデータの集計および分析を行い、高齢者の散歩から考える伝統的町並み環境の整備のあり方について考察を行う。

2. 八女市福島地区の概要

八女市は福岡県南部に位置し、総面積9866haで、人口は約4万3千人の地方の小都市である。八女市福島地区は、郊外の発展に伴い商業機能は衰退したものの戦災復興やモータリゼーションに伴う開発などから免れ、現在でも伝統的

* 正会員，福岡大学工学部社会デザイン工学科（Fukuoka University）

町家建築が多く残っており、平成14年には国の「重伝建地区」の選定を受けた地域である。また、同地区は高齢者の居住率が26.7%と比較的高い地域であり、高齢者にとって住みよいまちづくりが課題となっている。さらに、歩行快適性の観点から対象地を見ると、道路はアスファルト舗装されているものの、歩道と車道が分離されているところとそうでないところが混在している状況であり、住居の直前を自動車が通行する様子も見受けられることから、居住環境の歩行快適性が保たれていない箇所が多く存在することが認められる。

3. 高齢者における散歩の実態と町並みに対する意識調査

(1) 調査方法

本研究では、八女市福島地区における高齢者の散歩実態と町並みに対する意識の把握を目的とし、個別訪問および直接対話形式による聞き取りを行った。調査期間は2006年11月1日～12月10日の約1ヶ月で、調査対象者は八女市福島地区内の「街なみ環境整備事業（以下、街環事業）」対象区域内の住民である。今回の調査では高齢者の定義を60歳以上とした。表-1に示すように、個別訪問による意見収集が可能であった人数は69人で、うち有効回答は63人から得られた。八女市福島地区内には旧往還道路が貫通しており、その沿道に多数の伝統的建造物が立地している。八女市では、平成7年度導入の街環事業および平成14年度導入の伝建制度を併用することで、町並み環境の保存（建造物の修理・修景等）を行っている。なお伝建制度の導入

表-1 調査概要

対象	60歳以上の八女市福島地区居住者
場所	福島地区の街なみ環境整備事業区域
日時	2006年11月1日～12月10日の約1ヶ月間
調査方法	調査意図の確実な伝達のため 個別訪問による直接対話形式の聞き取り調査
調査人数	69人(男性35人, 女性34人)
有効回答数	63人(男性34人, 女性29人)

表-2 ヒアリング調査の質問内容

問1	性別・年齢
問2	居住地・居住年数
問3	日常生活の中で散歩は行うか？
問4	散歩の頻度
問5	散歩の所要時間
問6	散歩の実施時間帯(複数回答可)
問7	散歩を行う主な目的(複数回答可)
問8	普段通る散歩ルート(地図内に記述)
問9	ルート上で好きな箇所は？(地図内に記述)
問10	目的地の有無
問11	休憩場所の有無
問12	散歩中に目につくものは何か？(複数回答可)
問13	散歩を行うことで気がついた、福島町の町並みについての新しい発見はあるか？
問14	八女福島町の町並みが「重伝建地区」の選定を受けたことを知っているか？→【知っている場合】伝建地区選定以降、居住地または居住地周辺のことでも問題と感じることはあるか？
問15	伝建地区選定以前と現在では、町並みに統一感が出たと感じるか？→【出たと感じる場合】あなたにとって福島町の町並みはよりよくなっているか？
問16	町並みの中で改善してほしいと思う点は？
問17	福島町の町並みはどのようなイメージか？
問18	あなたの抱く福島町の町並みに対するイメージが感じられる通りや場所はどこか？

された「重伝建地区」は街環事業対象区域内に設定されている。本研究で実施した聞き取り調査の項目を表-2に示す。散歩の概要を把握するための基本的な質問をした後、実際に福島地区の地図を見ながら、日常の散歩ルート、ルート選択理由について具体的な場所の特定を含め意見収集した。さらに、町並みについての意識調査として、伝建地区選定の認識状況、住民が感じる現在の町並みイメージ等を把握した。

(2) 意見内容の単純集計分析

被験者の年齢構成は、70歳代が50%と最も多く、次いで60歳代が37%である【表-3】。また、20年以上の居住年数が9割であることから、被験者のほとんどは対象地に古くから居住していることがわかる。ここでは、ヒアリング調査により得られた意見内容について、単純集計可能な意見の分析を行う。

散歩に関する質問項目から得られた回答結果を表-4に示す。まず、日常生活の中で「散歩をする」と回答している人が42人で全体の約7割であった。その中でも36人(86%)が「健康のため」に散歩を実施しており、健康に対する意識が高いことがわかる。具体的な散歩実態としては、散歩頻度は「ほぼ毎日」の回答が5割を超え、実施時間帯は早朝と夕方が各々約3割を占めた。散歩所要時間は「30分未満」が約62%、「30分～1時間未満」が約33%で、両者を合わせると全体の約95%となり、被験者のほとんどが散歩を1時間未満で実施することがわかる。また、散歩中散歩頻度は「ほぼ毎日」の回答が5割を超え、実施時間帯は早朝と夕方が各々約3割を占めた。散歩所要時間は「30分未満」が約62%、「30分～1時間未満」が約33%で、両者を合わせると全体の約95%となり、被験者のほとんどが散歩を1時間未満で実施することがわかる。また、散歩中

表-3 被験者の基本属性

年齢構成	60歳代	70歳代	80歳代以上			
	23人(37)	32人(50)	8人(13)			
居住地域	宮野町	紺屋町	矢原町			
	15人(22)	14人(20)	10人(14)			
	小松町	京町	新町			
9人(13)	8人(12)	7人(10)	土橋町			
居住年数	1年未満	1-4年	5-9年	10-19年	20-29年	30年以上
	0人(0)	0人(0)	1人(1)	6人(9)	6人(9)	56人(81)

()内の数字の単位は(%)

表-4 散歩に関する基本的質問への回答結果

散歩の実施			
する	しない		
42人(66.7)	21人(33.3)		
散歩の目的(意見数)			
健康のため	気分転換	目課として	犬の散歩
36人	2人	1人	13人
散歩の頻度			
ほぼ毎日	週3～4回	週1～2回	1ヶ月に数回
23人(54.8)	8人(19.1)	8人(19.1)	3人(7.0)
散歩の実施時間帯			
早朝	午前中	正午頃	午後
13人(29.5)	1人(2.3)	2人(4.6)	8人(18.2)
夕方	夜中	決めていない	
14人(31.8)	3人(6.8)	3人(6.8)	
散歩の所要時間			
30分未満	30分～1時間	1～2時間	
26人(61.9)	14人(33.3)	2人(4.8)	
散歩中の休憩の有無			
する	しない		
3人(7.1)	39人(92.9)		
目的地の有無			
ある	ない		
8人(19.1)	34人(80.9)		
散歩ルートの特定			
決まっている	決めていない		
39人(92.9)	3人(7.1)		

()内の数字の単位は(%)

の休憩の有無については「ない」と回答している人が全体の9割を超えており、散歩における目的地の有無については「ない」と回答している人が約8割であったことから、歩くこと自体を主目的とした散歩が行われているということが言える。さらに、散歩ルートについては「決まっている」と回答した人が約93%で、残りの7%の被験者も、1つには決めていないが3パターン程度の中からその日の気分でルートを決めていると意見しており、被験者全員が何らかのルートを設定して散歩を実施している。また、散歩中に目につくものは何かという質問に対しては「自然の風景」が約44%、次いで「川や池などの水辺」、「舗装」が各々約16%であった【表-5】。自然に関する景観が全体の6割を占め、散歩において水辺などの自然要素の景観資源が認知されやすい傾向にあることが伺える。

次に、町並みに関する質問項目から得られた回答結果を表-5に示す。重伝建地区の選定を受けたことを知っているかという質問では「知っている」が94%で、町並みに対する認識の高さが伺える。また、伝建制度が導入されたことにより伝統的建造物の修理・修景が多く行われたことで、町並みに統一感が出たと感じるか尋ねたところ、65%の被験者が「ない」と回答している。さらに、町並みに対してどのようなイメージがあるかについては、「伝統的な産業がある文化的なまち」が54%で、次いで19%の被験者が「活気がなくなっているまち」と回答している。地区の特徴である伝統産業がまちのイメージに与える影響が強いことが伺えるが、現在の町並みに対して活気がないという意見があったことは郊外の発展や人口の減少が影響していると考えられる。

(3) 散歩経路の利用実態

ここでは、散歩を行う被験者の散歩ルートと選択理由に関する意見内容について、さらに散歩ルートと町並みに対する意識の関係性について述べる。

a) 散歩の所要時間別に見た散歩ルートと意見内容

まず散歩所要時間別に分類し、各散歩ルートと選択理由に関する意見内容から分析を行う。

散歩の所要時間が30分未満の被験者の場合、散歩ルートの延長が1Km未満であることが多い【図-1】。そのため、街環事業区域内（図中に破線枠囲みで表現）で散歩ルートを形成している傾向が見られる。また、散歩ルートのほとんどが4回から6回の曲がり回数であり、単純なルート構

表-5 町並み等に関する質問への回答結果(回答数63人)

散歩中に目につくもの(複数回答可)			
自然の風景	44	家々の植栽	5
川や池などの水辺	16	町家	5
舗装	16	車	2
人々の活動風景	13		
伝建地区選定の認識度			
知っている	94	知らない	6
町並みの統一感			
ある	35	ない	65
町並みのイメージ			
伝統的な産業がある文化的なまち	54	歴史的な町並みがあるまち	6
活気がなくなっているまち	19	その他	8
静かでほっとするまち	10	特になし	3

数字の単位は(%)

成となっている。この結果から30分未満の散歩を行う高齢者は複雑なルートよりも比較的わかりやすいルートを選択していると推察される。さらに、散歩ルート上の好きな箇所には、公園や神社、歩車分離の広幅員の道路、歩車分離でない狭い道路、歩行空間周辺の田んぼなどが挙げられている。主な理由として、公園や神社を好んでいる人は「水辺があって気持ちがいい」、「緑がいっぱい落ちて着く」などの意見を持ち、散歩者には自然が感じられる空間として好まれている傾向がある【表-6】。さらに「散歩をしている人たちと出会える」との意見もあり、人との触れ合いが散歩の楽しみにつながることも示唆される。道路自体を好きな箇所として挙げている人は、道路の広い狭いを問わず共通する意見として安全性を重視する傾向がある。車は散歩をする上で危険な要素のひとつとして認識されており、狭い道路では「車の通りが少ない」との理由から安全性の高い道路として好まれていることがわかる。また、歩行空間の印象の面では広い道路では開放感、狭い道路では静けさがあることにより好まれていることが伺える。田んぼの風景を好む理由として「季節を感じる事ができる」、「のどかな感じがいい」との意見が得られ、季節の変化を視覚的に認識することを評価していることがわかる。

次に散歩の所要時間が30分以上である被験者の散歩ルートとルート上での好きな箇所について述べる【図-1】。散歩ルートは30分未満の被験者の場合と比べるとそのルート延長は長く、距離にして2Km以上である場合が多く見られる。それらルートは主に、町並みを四角に囲む環状線と街路（路地や生活道路等）との組み合わせによって構成されていることがわかる。ルートの特徴としては環状線主体の曲がり回数4回のルートが多いことから、30分未満の散歩者同様に比較的単純でわかりやすいルートを選択していることがわかる。また、好きな箇所として挙げられている道路や場所、風景も30分未満の散歩者と一致する箇所が多いが、環状線全体を通して好んでいる点においては差異が見られた。環状線は開放感や安全性があるという理由で好まれる以外にも、変化のある歩道幅員や多様な街路樹の存在も散歩ルートとしての魅力につながると考えられる。

以上より2つの散歩ルートの特徴を把握した。1つは、所要時間30分未満の被験者の場合、延長は短く街環事業対象区域内に散歩ルートを設定するというものである。もう一方は、所要時間30分以上の場合、比較的長距離で町並みを四角に囲む環状線を中心に街路（路地や生活道路等）との組み合わせで散歩ルートを形成するものである。さらに

表-6 好きな箇所および選定理由

好きな箇所(人数)	理由(意見数)
福島八幡宮(7)	水辺があって気持ちがいい(4)/自然がいっぱいあるから(2)/散歩をしている人たちと出会える(2)
八女公園(4)	緑がいっぱい落ちて着く(3)/犬がいるため安全な広い空間がいい
広い通り(4)	開放感がある(2)/日あたりがよくて気持ちがいい(2)/歩道は安全だから
狭い通り(2)	車も人通りも少なく静かで歩きやすい/車が少なくていいから
田んぼの風景(3)	季節を感じる事ができる(2)/のどかな感じがいい(2)
特になし(6)	

調査結果から、散歩の所要時間および距離に関係なく散歩ルートは単調に構成されており、散歩を行う上で自然の有無、安全性、開放感や静けさ、さらには変化のある景観が重要な要素であることが示唆される。

b) 散歩ルートと町並みに対する意識の関係性

ここでは、前述の散歩所要時間の違いから把握された2つの散歩ルートの特徴を踏まえ、散歩ルートと町並みに対する意識の関係性に着目し、町並みの中の改善点に関する意見内容の分析を試みる【表-7】。

まず、共通する意見として「歩道をしっかり整備してほしい」という歩行快適性を追求する内容や、「空き家を減らして人が住まない」と「商店街に活気がない」などの町並み内の空き家増加に起因する衰退を指摘する意見が挙げられている。これらとは対照的に「現状に満足している」という意見も得られた。

次に共通しない意見としては、散歩所要時間30分未満の被験者の意見で「白壁の家に連続性がない」、「水路をきれいにしてほしい」などの伝建地区におけるハード整備の問題点を指摘する内容が挙げられている。さらに、「建物の外観をよくしても住民全員が町並みをよくしようとする意識がなければまちはよくなる」との意見もあり、ハード

表-7 散歩所要時間別に見る町並みの改善点

		町並みの中で改善してほしいこと(意見数)
散歩所要時間	30分未満	白壁作りの家がぼつぼつとあるだけでは美しく見えないので連続性を持たせて整備してほしい(4)/空き家を減らし人が住まないと活気が出ない(2)/水路をきれいにしてほしい(2)/旧住遺道の舗装をしっかりと整備してほしい(2)/伝建地区を守ることに捕らわれすぎている。住民が住みやすくなるまちづくりをしてほしい(2)/現状のままでいい(2)/商店街に活気が出るよう取り組んでほしい(2)/田んぼを減らさないでほしい/建物の外観をよくしても住民全員が町並みをよくしようとする意識がなければまちはよくなる(2)/細い通りにも緑をふやしてほしい
	30分以上	歩道をしっかり整備してほしい(5)/空き家を減らして人が住まないと活気が出ない(2)/郊外に大型ショップが増えたことで商店街にあるお店がどんどん閉まっている(2)/田んぼを減らさないでほしい/商店街に活気がない/伝建地区をもっと徹底的に整備してほしい/現状のままでいい

整備だけではなく、ソフト対策の向上がなければ町並みを活性化させることはできないと考える意見も得られた。また「伝建地区を保存することに捕らわれるのではなく住民が住みやすくなるようにまちづくりを行ってほしい」という伝建地区保存活動に対する批判的な意見も得られた。

以上の分析から、町並みが散歩ルートである歩行空間として位置付けられる場合、その町並みへの改善点に対して散歩者の意見が顕著に反映されることが伺える。

c) 散歩の実施時間帯から見る散歩ルートの特徴

ここでは、散歩の実施時間帯別の被験者の散歩ルートと意見内容から、街路の散歩ルートとしての特徴を明らかに

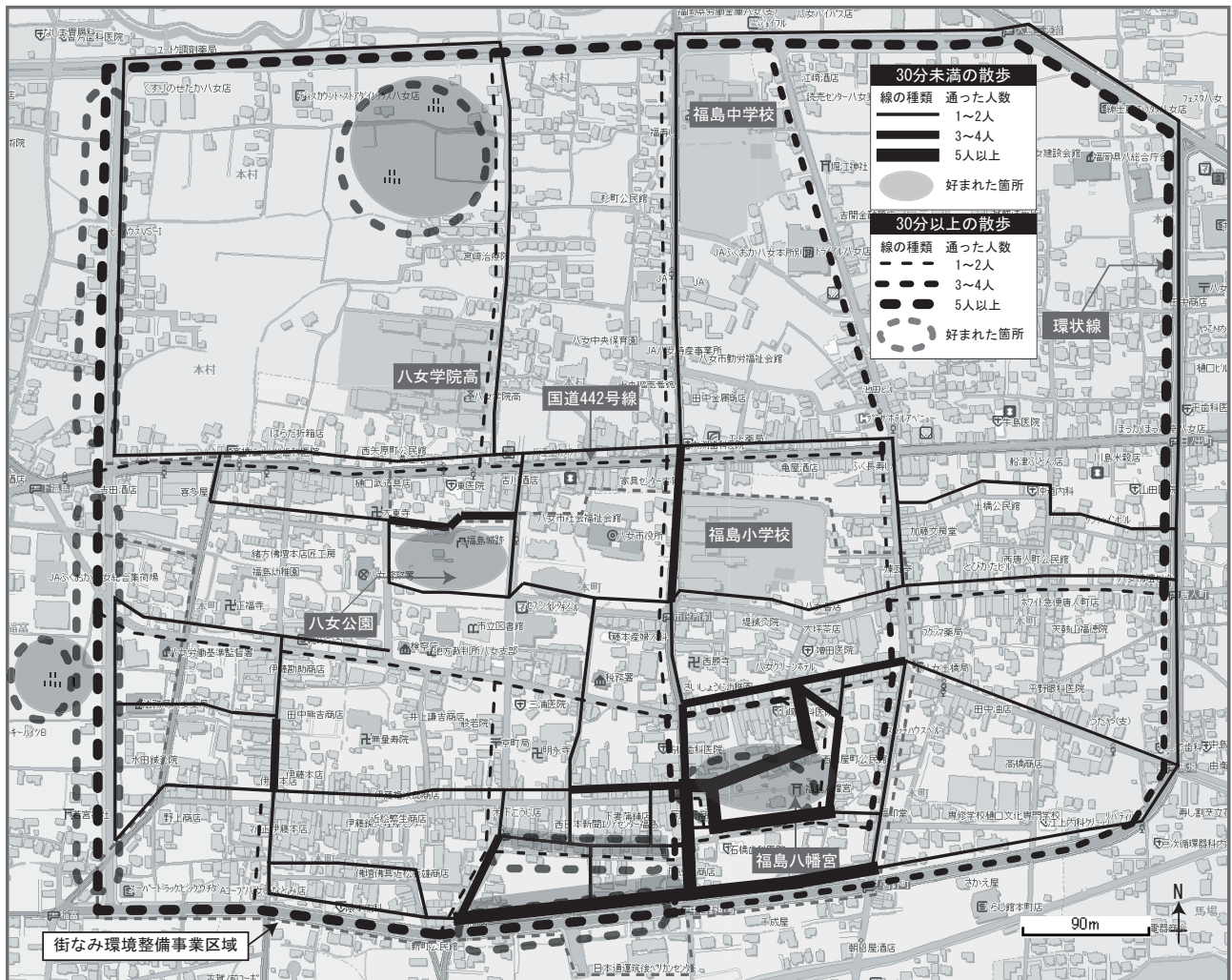


図-1 被験者が利用した通りの人数と好まれる箇所

する。なお、ヒアリング調査結果より被験者意見が集中した、早朝、午後、夕方の3つの時間帯について分析を行う。

まず早朝における散歩ルートは、居住地周辺で形成される距離の短いものから、環状線を利用する比較的長距離のものまで多岐に渡るといふ特徴を持つ【図-2】。どのルートにも共通して、自然要素を有する景観が含まれている。福島八幡宮や八女公園、田園風景周辺の通りや街路樹のある環状線がルート構成要素になっており、早朝に散歩を行う理由としても「空気がよくて自然がきれいに見える」、「車の通りが少なく空気がいい」といふ意見が得られた【表-8】。このことから自然景観や、車の交通量の少なさ、清澄な空気は散歩を促進する要素のひとつと考えられる。

次に午後における散歩ルートの特徴として、自然景観を含めたルートや環状線と町並み内の街路を組み合わせたルートが見られる【図-2】。午後に散歩を実施する主な理由としては「日差しがあたたかくて気持ちがいい」といふ意見が挙げられている。町並み内の比較的狭い街路は建造物に挟まれて日当たりの悪い通りが多いが、環状線は歩車分離の幅員の道路であるため、比較の日当たりは良好であるという特性がある。このことは散歩者に好まれるひとつの要素であるといえよう。

表-8 実施時間帯の選択理由

時間帯	理由(意見数)
早朝 (13人)	車の通りが少なく空気がいい(3)/早朝しか散歩を行う時間がない(2)/空気がよくて自然がきれいに見える/1日のはじまりとして歩く/としゃきとする/子供の頃からの習慣
午後 (8人)	日あたりがよくて気持ちがいい(3)/友達と時間が合う時間帯(2)/暇な時間帯(2)/知り合いと会える
夕方 (14人)	仕事が終わってから行う(4)/時間の都合がつく時間帯(2)/学生の帰宅などにより人通りが多い/1日の締めくくりとして行う

夕方における散歩ルートでは、早朝、午後の被験者と同様に環状線や福島八幡宮、八女公園周辺の通りの利用が見られることに加えて、小学校や中学校沿いがルートに選定されている点が早朝や午後には見られなかった状況である【図-2】。夕方に散歩を行う理由として「仕事が終わってから行う」など、仕事等の時間的制約から夕方に実施するという意見があるのに加え、「学生の帰宅などにより人通りが多い」といふ意見もあり、人通りの多さや人々の活動風景が散歩を行う上で重要視されることが伺える。

4. 高齢者の散歩の観点から考えるまちづくり

ここでは、町との関係を長年にわたり形成してきた高齢者を対象とした調査結果を踏まえ、高齢者の意見はより土着的に町の状況を捉えているとの前提のもと、高齢者の散

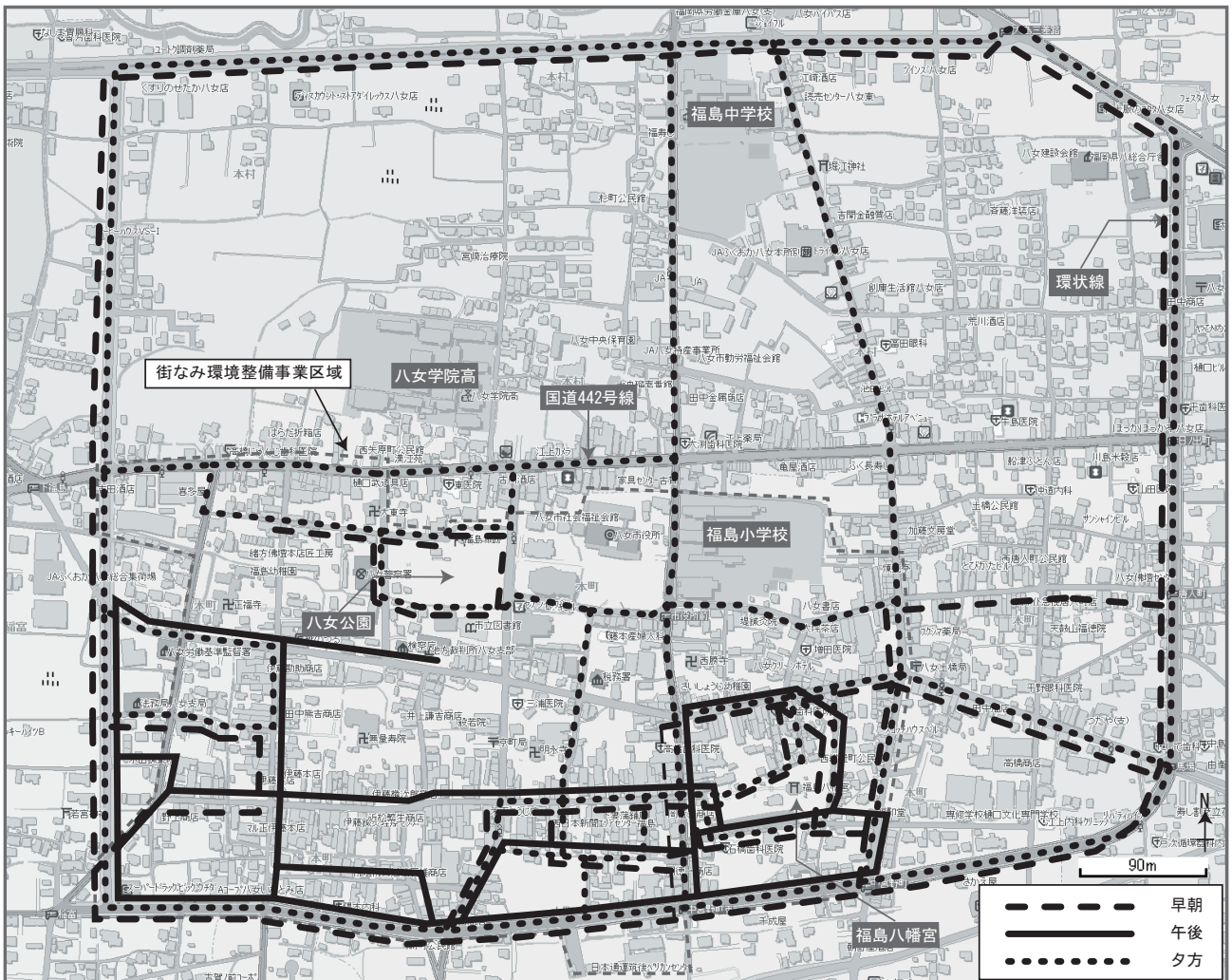


図-2 実施時間帯別の散歩ルート

歩の観点から総合的な考察を行うこととする。

(1) 快適な散歩ルート提案への示唆

今回行ったヒアリング調査から、散歩ルートとして快適性が得られる歩行空間の条件が抽出された。福島地区における高齢者の中で散歩は広範に行われており、健康志向型で1時間未満の散歩が多い。規模に関係なくわかりやすさを重視した上で形成されているルートが多く存在した。ルートとしては単調ながらも、季節の変化が感じられる景観要素のある通りの利用や、開放感のある通りと静かで落ち着いた着きのある通りの組み合わせから体感できる景観に変化をつけ、めりはりを持たせた散歩ルートの形成がなされている。また自然景観を多く含む場所も散歩を行う上で大きな役割を果たしていることが見受けられる。しかし本調査の分析結果によれば、福島地区における高齢者の散歩とは、歩行活動に健康維持などの目的を有することで意義が見出される行動と考えられる。つまり、公園や神社などは目的地としての場所性ではなく、散歩ルートの中でのひとつの好まれる自然景観要素として位置付けられていると考えられる。以上のことから、視覚情報や体感により変化を有する要素、あるいは自然景観の充実が散歩を促進する「触媒」として有効であると言えよう。

(2) 散歩ルートと町並み認識の関係性

前述したように本対象地である福島地区の町並みは、歴史的建造物や環境物件の伝統的景観を多数有する地域であり、重伝建地区の選定を受けている。しかし本調査の分析結果によれば、町並みを特徴づけている伝統的建造物群の景観を好む意見というよりは、伝建地区保存活動に対する批判的かつ厳しい意見が得られている。こうした意見内容は、伝建地区に指定された町並み内に散歩ルートを形成していた散歩所要時間30分未満の被験者のみに見られた。このことから、散歩ルートとして利用される歩行空間の情報が町並みに対する意見に強く反映されている可能性が抽出できよう。つまり、伝建地区を形成している街路が散歩ルートとして利用されることは、善悪を問わず町並みに対する意識の変化につながることを示唆される。

(3) 散歩から考える伝統的町並み環境整備のあり方

現在、福島地区が抱えている問題点として、人口の減少や伝統産業の低迷などによる活気の衰退が挙げられているが、活性化を図るための施策として、交流人口の拡大を目的とした伝建地区の整備、すなわち伝統的建造物の修理・修景が継続的に行われている⁴⁾。町並み保存活用計画によれば「福島固有の町並みを質の高いものにすることで、それが後に住民の誇りとなるとともに、来客者への感動につながる」と謳われており、伝統的建造物の修理・修景は住民と観光客の双方にとってメリットになるとされている。しかし、伝建地区の街路を散歩ルートとして利用している高齢者の意見からは、「旧往還道の舗装をしっかりと整備してほしい」という町並みへの改善点も挙げられており、歩行空間としての歩行快適性は充足していないことが推察される【表-7】。建造物は歩行空間を構成する重要な要素である

が、それ以上に安全性や歩行快適性等の道路自体が発揮する機能は散歩者にとって最も重要であろう。歩行空間が散歩だけに利用されるものではないことは当然であるが、歩くこと自体を主目的とした散歩者に満足される歩行空間であれば、歩行快適性は得られているに相違ないと考えられよう。町並みは住民の居住環境であり、まちづくりを行う上でも住民が歩行快適性を得られる空間形成は重要な意味を持ち得る。このことから、伝建地区の整備を進める上で歴史的建造物の修理・修景だけでなく、歩行快適性と歩くこと自体から得られる楽しさを保持した道路整備を高齢者の観点から考慮することによって、伝統的景観の魅力がより人々に伝わることになるのではなかろうか。

5. おわりに

本研究の成果は以下の通りである。

- 1) 調査で得られた意見の単純集計分析から、高齢者の散歩の目的・頻度・時間や目的地・休憩の有無といった散歩実態を明らかにすることで、福島地区における高齢者の散歩は歩くこと自体を主目的としていることが明らかとなった。
- 2) 散歩所要時間と形成された散歩ルートの関係性について、散歩の所要時間および距離に関係なく単調でわかりやすいルートが形成されながらも、自然景観や道路景観の変化を含めることでめりはりをつけたルート形成がなされている傾向が明らかとなった。
- 3) 散歩の実施時間帯別に散歩ルートを見ると、自然の有無、安全性、道路景観の変化に加えて、人々の活動風景や通行量も散歩者に好まれる重要な要素であることが見出された。
- 4) 町並みの問題点として、散歩ルートとしての歩行空間を中心に意見が挙げられる傾向が見られたことから、散歩ルートで利用される歩行空間の情報は選り好みに関係なく認知され、散歩が町並みに対する意識の変化に影響を及ぼす可能性が示唆された。町との関係を長期的にわたり形成してきた高齢者の意見を踏まえ、伝建地区の整備を進める上で歴史的建造物の修理・修景だけでなく、歩行快適性と歩くこと自体から得られる楽しさを保持した道路整備の一体的な取り組みによって、伝統的景観の魅力がより人々に伝わることになると思われる。

【補注】

- (1) 「歩行活動」とは、本稿においては「散歩」だけに限定せず「人の歩き」に関する行動を全般的に捉えた概念として用いている。

【参考文献】

- 1) 森一彦・井上昌子・奥田夏子(2004)「2つの異なる地域環境における高齢者の散歩行動の比較分析—既成市街地と新興住宅地におけるケーススタディ」、日本建築学会計画系論文集 No. 583, pp. 53-59
- 2) 末江真・包清博之(2005)「都市における人々の散歩行動からみた住環境の整備条件に関する基礎的研究」、ランドスケープ研究 68(5), pp. 829-832
- 3) 大森洋子・西山徳明(2000)「歴史的町並みを観光資源とする地域におけるまちづくりに関する研究—筑後吉井の町並み保存事業を事例として」、第35回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 811-816
- 4) 八女福島伝統的町並み協定運営委員会(2003)「八女福島のまちづくり—町並み保存活用計画」